

◇◇◇ユース栃木山行◇◇◇

春山山行 会津駒ヶ岳

期日：2024年3月24日(日)

場所：会津駒ヶ岳(2132m)

参加者：《スキー班》渡邊、後藤、山本(ゲスト)

《歩行班》高野、鬼頭、仲畠、林、荒井

行動概要：民宿こまどり＝駒ヶ岳登山口…駒ヶ岳山頂
12:50～13:20…駒ヶ岳登山口 15:20

- 今回は前日にコンセーレで行われた講演会の講師である山本正嘉先生をお迎えしての山行。講演会終了後、会津駒ヶ岳登山口傍の民宿へ移動。民宿に到着後して間もなく夕食、しばし山本先生を囲んでの懇親会となった。
- 翌朝、宿での朝食を済ませ7:40に宿を出発。宿から登山口までは50m程で、そこに車をとめさせていただいたのは有難い。前日雨がふったせいか路面は凍結。登山口である林道に入るとスキー班の3名は早速スキーを装着、歩行班はつば足で登山を始める。この時期の会津駒ヶ岳はさすがに多くの人が入っているらしく、トレースがしっかりとしている。10分ほどで林道を外れ、夏道とは違うルートに入ると徐々に傾斜がきつくなる。スキー班は、その斜面でも順調に高度を上げていき、その後を歩行班が続いた。山スキーの経験がない自分は、登りは歩く方が楽な感覚であったが、多少つづら折りの切り替えしで持て余してしまうように見えても、グイグイと進んで行く後ろ姿を見ていると羨ましく思えた。山本先生の指示もあり、早すぎず遅すぎずの安定したペースで前方を進んでいった。
- 標高1200m付近で尾根に出てひたすら山頂めざして上りが続く。天気も良くまさに春山といった暖かさだ。標高が高くなるにつれ積雪が多くなりトレース上を歩いても所々で踏み抜くためにワカンを装着。足元は重くなるが格段に歩きやすくなる。トレースを外れ、敢えてラッセルしてみると、雪が重くてかなり苦労した。山頂直前は開けた緩い尾根となり、空の高いところに薄雲があるくらいで、景色も良くとても気持ちがいい。山頂に着いた時には顔がすっかり日焼けしていた。休憩後に下山を始めるが、スキー班は板底のシールをはがすと、登ってきたルートとは違う谷へと滑り出す。歩行班は来たルートを下る。下るスピードの差は歴然でかなりの差がつくと思われたが、意外に同じ時間で下山することが出来た。スキー班は藪で苦労したらしい。前日の講習会に続いて有意義に春山を楽しむことができた。今回学んだことを、今後の山行に活かしていきたいと思う。



出発時 民宿前で



山頂まであと少し



会津駒ヶ岳山頂にて

夏山山行 劔岳(早月尾根)

期日：2024年7月31日(水)～2日(金)

場所：北アルプス 劔岳(早月尾根)

参加者：荒井、林、深谷

行動概要：

○7/31(水)：県内＝馬場島荘【泊】

○8/1(木)：馬場島荘 4:10…早月小屋 7:55～8:25…

劔岳山頂 11:05～12:00…早月小屋 13:50【小屋泊】

○8/2(金)：早月小屋 5:30…馬場島荘 8:20

【第1日：7月31日(水) 晴】

○県内では例年よりも遅い梅雨入りと早い梅雨明けを迎え、連日猛暑が続いている。劔岳周辺は北陸地方の梅雨があけていないせいか不安定な天候が続いているようだが、ようやく明日には明けて絶好の夏山日和となりそうだ。今年の夏山もどこにいかとあれこれ考えた挙句、早月尾根からの劔岳となった。実は私はまだこの山に登頂したことがない。30年ほど前に当時今回の三人も活動していたマロニエアルパインクラブで劔沢までは来ているが、日程の都合で山頂を踏まずに下山してしまった。この時林さんは八ツ峰からのバリエーションルートで登頂している。個人的に行きたいと思っていたが、遠いこともあり、ようやく実行となった。

○三人で合流後、10:00頃真岡を出発、北関東・関越・上信越・長野・北陸自動車道を経由して富山県に入る。滑川ICで高速を下り、まさに山へ向かって車を走らせる。早月川の橋を何度か渡りながら川の流れに目をやると、水は灰色に濁り水量も多く感じた。これまでかなりの雨が降ったようだ。途中狭くなる道で、たまにすれ違う大型ダンプに注意しながら馬場島荘へ到着したのは16:30過ぎとなった。普段の山行なら車中泊となるが、今日はこの山荘で入浴・夕食を済ませ、ビールでほどよく酔った後、明日に備えて眠りについた。

【第2日：8月1日(木) 晴】

○3:00に起床、部屋で昨日夕食のときに頂いたマズしなどで朝食を済ませ4:10馬場島を出発。昨夜は0:00過ぎあたりからだろうが、2階にある部屋の前の駐車場に入ってくる車や人の声で何度か目が覚めた。夏至から比べると日の出の時間がずいぶん遅くなり、ヘッドランプを装着して歩き始める。しばらくは樹林帯の中の急登を進む。この早月尾根ルートは、北アルプス三大急登だけあって地図で見ても勾配がきついのがわかる。標高762mの馬場島から早月小屋を経て山頂の2999mまで、とにかく登り続ける体力勝負のルートである。途中の早月小屋で一泊するのが一般的かと思いきや、最近の活動記録を見ると、日帰りでアタックする単独行の方が多くいよう。夜中に行動を始めていた方々もそうだろう。歩き始めてからもトレランスタイルの何名かが抜かしてい

った。我々はいえ、せっかく遠くまで来たことだし山を楽しみたいので早月小屋に一泊の予定である。が、今日のうちに山頂に立ちたいのであまりのんびりもしてられない。午後になるとガスも心配である。

○樹林帯の中ではあるが、天気も良く、右手には大日岳を眺めながら高度をあげていく。視界が開けて丸山に立つと、目の前が早月小屋だ。小屋で宿泊の手続きと不要な荷物をデポし山頂へ向かう。岩稜帯に出る頃には山頂から左手に伸びる荒々しい岩の稜線が見え、劔岳に来たんだと実感することができた。山頂直下は難所が続くが、梯子や鎖、足場のボルトが整備されている。岩場も三点支持を心掛けて慎重に、そして楽しみながら登っていくと、思ったよりも早く山頂へ到着した。平日ではあるが、山頂はなかなかの賑わいだった。天気もいいので、ゆっくりと休憩をとり、景色を楽しむことができた。早月尾根の反対側には源次郎尾根と八ツ峰が見え、次回はあちらからこの場に立ちたいと思った。しばらく頂上を満喫し、来たルートを下山していく。所によりクライムダウンをして早月小屋に到着。無事にここまで戻ってきたことを祝しビールで乾杯をした。

○この小屋は水場が無く、全てヘリでの荷揚げになる。そのため水は貴重で、ペットボトル20で1300円、500mlだと600円となる。食事の容器も使い捨てだった。夕食後も天気が良かったので、消灯後に星空でも眺めようかと考えていたが、すっかり眠ってしまった。

【第3日：8月2日(金) 晴】

○5:00時からの朝食を済ませ5:30に早月小屋を出る。昨日の道を約1500mを一気に下りていく。やはり来たルートを戻るのは精神的にも疲れることを実感した。予定よりかなり早く、8:20馬場島に下山することができた。馬場島荘でシャワーでもと思ったが、時間が早いため営業しておらず、富山市内の水橋温泉まで車を走らせた。帰りには林さんの提案で梅海新道の起点である親不知海岸を散策し、夏山を無事に楽しく終えることができた。



小窓尾根をバックに



山頂直下の鎖場

丸山より早月小屋と劔岳



劔岳山頂にて



冬山山行 日光白根山(東稜)

期日:2024年12月20日(金)

場所:日光市 白根山(東稜)

参加者:荒井、林

行動概要:

○12/20(金)菅沼 P7:30…東稜取付き 10:45…白根山

13:15…弥陀が池 14:00…菅沼 P15:15

- 金精道路が閉鎖される前に行かねばと、今回予定したのは日光白根山東稜、登り慣れた白根ではあるが、いつもと違うバリエーションルートである。
- 今年は11月末まで暖かい日が続いたが、12月に入ると平年並みに冷え込んできた。奥日光では積雪も増えたのではと思ったが、ここ数日はそれほど降雪がなかったらしく、登山道はしっかりとトレースがあり弥陀が池までは歩きやすい。そこから五色沼へルートをとると途端に新しいトレースは無くなりラッセルとなる。五色沼で小休止をとりつつ、ハーネス類の登攀具を装着する。避難小屋へ向けて少し進むと右手にせり出してくる尾根が東稜になる。尾根に取りつくと、ひたすらラッセルがはじまる。2249mピークを過ぎてからの急登はダブルアックスを使いながらのラッセルで、樹林帯を抜けてようやく一息ついた。岩稜帯に出るとやはり風が強くなり、岩陰で小休止、最後の登りに備える。風はあるが天気は良く、東稜の荒々しい尾根と五色沼の景色が素晴らしい。ラッセルは無くなったが、岩稜帯の急登はアイゼンが刺さりきらず、バランスをとりながらの歩行は結構疲れる。遠くからも見えていた二本のピナクル、短い区間ではあるがナイフリッジを通過し、核心部の大岩を登りきると山頂北側のピークへ辿り着く。山頂での気温は約 -10°C 、予想より風もなく穏やかで、しばし景色を楽しむことができた。とはいえ、予定より時間も押していたので下山を急ぐことに。弥陀が池までの下りは傾斜がきつい為、疲れてきた体にこたえたが、そこから先は踏み固められた登山道となり快適だった。
- いつもとは違うルートからの白根山はやや緊張するところもあったが、天候にも恵まれ、充実した山行となった。



東稜(左が山頂)



山頂までもう少し



白根山山頂にて

追悼

【故 山野井武夫氏 会員番号：4633 永年会員】

○2024(令和6)年6月4日逝去 享年90歳

○日本山岳会栃木支部設立会員 元栃木支部長

○栃木支部長在任期間

2010(平成22)年10月1日～2015(平成27)年3月31日



総会での支部長挨拶
2011(平成23)／5／28

2010(平成22)年10月11日(月)の第5回役員会において、支部長交が緊急の議題として提案され、新支部長には山野井武夫副支部長が就任し、交代時期は遡って2010(平成22)年10月1日とすることになった。(『栃木支部報』2012年4月号より)



夏山山行・懇親会 8(2008(平成20)／8／31)
加仁湯の玄関前にて【立看板をもっている方】



夏山山行・懇親会 8(2008(平成20)／8／31)
鬼怒沼の木道にて【左から5人目の方】



秋山山行(2014(平成26)／9／14)
室堂にて
【前列右から3人目の方】

夏山山行(2013(平成25)／8／24)
加仁湯にて
【前列中央の方】



◆◆◆会員情報◆◆◆

……………水野雅章会員……………

水野雅章会員は、「船村徹ふるさと会」会員でもあります。故・船村徹氏の没後7年の追悼式や特別講演についての原稿を寄せられました。

船村徹先生と金津氏講演会、美空ひばりと共に

「船村徹ふるさと会」会員 水野 雅章

○2月16日は国民の祝日「山の日」の制定に貢献された、故・船村徹先生（文化勲章 受章者、日本山岳会会員）のご命日です。

○栃木支部会員の皆様には、船村徹先生が日本山岳会会員にもなられ「山の日」制定にご尽力された経緯は既にご存知かと思いますが、毎年この日には出身地塩谷町のメンバーを中心に結成されている「船村徹ふるさと会」主催で供養祭が実施されています。今年（2024年）の没後満7年の供養祭も「道の駅湧水の郷しおや」の顕彰碑前にて開催され、約60名の方々が哀悼の誠を捧げられました。

○その後、特別講演として、ビートルズの研究者で船村先生のファンでもあり、戦後の歌謡音楽界の事情にも大変造詣の深い、金津猛氏（元、亀田製菓社長）から「ひばりさんとビートルズと船村先生と」と題して、講演をいただきました。

○原稿や資料を前にすることなく、約2時間にわたり、講談師の如く滔々（とうとう）と語られる内容は、船村先生や美空ひばりさん、ビートルズへの愛と尊崇に溢れ、聴衆を圧倒する迫力がありました。

○60歳代以上の皆さんには恐らく子供の頃からなじみの深い、戦後「ボーイズもの」の草分け、「地球の上に朝が来るう〜♪」などで有名な川田晴久（川田義雄）のお話や、彼を唯一の「師匠」と仰ぐ美空ひばりとの出会いの経緯など、大変興味深く伺いました。

○生前、船村先生は美空ひばりの天賦の才を早くから認められ、『ひばりの佐渡情話』などを通じて「浪曲の技法による歌謡曲・演歌」という考え方の紹介や、彼女の「音域の広さや音の波動の特殊性」について、注目され「対等の立場で勝負する」気持ちで接せられたのではないかな？などのエピソードも指摘されました。

○また船村先生は「ビートルズを見つけたのは俺だ！」と生前「自慢」されており、その経緯や背景などご存知の方も多いと思いますが、その時代の海外の音楽事情やビートルズのデビューの経緯なども含め、詳しくご披露頂きました。

○船村先生は、自然豊かな日本の山や、伝統的な文化を大切にしつつ、それらを背景に「日本人の心」に響く楽曲を作曲されてきたことを認識し、「歌は心でうたうもの」との教えと共に「山の日」に込められた「想い」を感じることが出来ました。これらの考え方を、これからも皆で語り継いでゆきたいものと、改めて感じた一日でした。



道の駅湧水の里しおや HP より

不定期で発行される支部通信には、支部長の巻頭言が載っている。そのうち二編を再掲する。

【支部通信2024年9月号(9/26発行)】

- 今年の夏は異常なほど猛暑続きでした。涼を求めて山に入ってもその暑さはほとんど変わらず閉口しました。そんな酷暑の続く日々の中で、6月と7月にカラコルムのスパンピーク峰(7027m)で、8月には同じカラコルムのK2峰(8611m)で遭難事故が発生しました。スパンピークでは2名と1名、K2では2名です。5名とも私の旧知の方々でしたので心休まらない日々となりました。特に7月1日にスパンピーク登頂後の下山中にクレバスに転落したことによって死亡した大西浩氏とは、パキスタンへの出発直前まで連絡を取り合っていた仲ですので大変な衝撃でした。氏とは研修会や、テキストの執筆や編集を長年一緒に担当したりしてきましたので、こんなことになるとは想像すらしませんでした。氏は高校生を自立した登山家に育てることに、今年の3月末まで情熱を燃やし続け、4月からは退職して自らの夢を追い求める登山を始めたばかりの出来事でしたので、言葉にもなりません。11月に松本でお別れ会が予定されているので、氏の活躍を偲んできたいと思っています。ご冥福をお祈りします。
- 登山界では最近著しい変化が起きております。かつては8000mの高峰や未踏峰への海外登山、中高年を中心とした百名山ブームなどが顕著でしたが、最近の海外登山ではヒマラヤの6000～7000m峰の未登の壁へアルパインスタイルでの登攀が脚光を浴びています。また、国内では健康志向の低山登山がブームとなっています。テレビ番組でも「低山登山」を取り扱ったものが大変多くなりました。本支部でも支部山行は、支部会員の高齢化に伴って「低山」に行く機会が多くなりました。しかしながら低い山だからと侮ってはいけません。7月に全国遭難対策協議会が文科省の講堂で開催されました。そこでは、低山における遭難事故、特に道迷いが多くなった事案が報告されています。山は高かろうが低かろうが、そこには自然に内在している危険がたくさんあります。ましてや、登山者側に内在している自分では「見えてない危険」があります。登山者として、自然の中で活動させていただいているわけですので常に謙虚に自然に向き合いたいものです。

【支部通信2025年1月号(1/30発行)】

- 日本山岳会120周年記念事業として多くの興味深い事業が実施されている。最近では1月24日に[山岳会のヒトとモノ]講座『ナンダ・デヴィ縦走』が山岳会のルームで開催された。

- この登山隊は1976(昭和51)年に実施されたもので、私は大学を卒業して2年目であったので大変興味深いものであるが参加できる力も環境にもなかったが、身近な先輩や同級生が隊員として参加していたので成功裏に終わったことは大変うれしかったのを昨日のここのように覚えている。
- 会の冒頭に、1951年ナンダ・デヴィでなくなったディプラの「いつかある日」の歌が紹介され、これまた大変懐かしく感慨深くなった。ディプラの手帳に記されていた詩はけっこう長編のものであるが、深田久弥氏が短く訳詩し、西前四郎氏が作曲して、山仲間であ唱されることになったものである。悲しいことだが、山での知人の遭難事故死に遭遇すると思い出される山の歌の定番になってしまっていた。
- 会は、当時の隊長であった鹿野勝彦氏の記憶をたどりながら、50年も前の隊員であった重廣恒夫氏らも対談に参加し、日本山岳会としては社会人山岳会との初めての合同チームを編成した経緯や、最近では流行らない大所帯のチーム登山、人と人とのつながりの重要性、ヒマラヤ縦走登山の先駆け、その後の日本山岳会のヒマラヤ登山のあの方など、大変興味深い話を聞くことができた。まさに「そうだったのか!」と思いつくことが多い「温故知新」の講座であった。会場がルームだったので、参加者は20名程度であった。ほとんどが当時からの会員だったので平均年齢は容易に想像できるでしょう。このような会に、若い会員が参加してこないのはせっかく宝の山がたくさんあるのに、残念なことである。
- 過去の経験を共有できることは、次へのステップの大きなエネルギーになるはずである。日本山岳会は120年の歴史があるが、各大学山岳部は次々と創部100年を迎えている。残念にも部員がほとんどいなくて、過去の栄光を引き継がない大学もあるようである。伝統は現役の中に生きているので、廃部にならないことを切に祈るばかりである。私が所属する山岳部も100年を迎え、幸い現役部員も結構な数いるので、記念誌、記念式典、記念海外登山などの行事の準備に力が入っている。大きな一つの区切りは、大変楽しみである。
- 支部の冬山・新年会山行は、1月19～20日、塩原地区の鶏頂山、日留賀岳を登り、君島会員のご高配で、明賀屋本館にて新年会・宿泊させていただいた。ユースやマスターズもそれなりの山行をしっかり行っている。会員各位には報告を是非しっかり読んでほしいと思う。また2月には「ヒマラヤの集い」、3月には「山の講演会」を予定している。開催案内を添付しているので、是非岳友をお誘いして参加してもらいたい。

◇◇栃木支部会員◇◇◇

No.	番号	氏 名	備 考
1	6956	井上 孝郎	
2	7914	渡邊 雄二	支部長、兼事務局長
3	8282	上野川 孝一	
4	8383	前田 洋子	
5	8386	牛窪 光政	会計監事
6	8432	前田 文彦	
7	9265	石沢 好文	副支部長
8	10459	仙石 富英	委員
9	10885	蓮實 淳夫	
10	11381	関根 和男	
11	11621	高野 正道	
12	12466	長 百合子	
13	12503	菱田 克彦	委員
14	13600	永谷 義篤	
15	14419	斎藤 隆	
16	14438	神島 仁誓	委員
17	14510	桑野 正光	会計監事
18	14518	猿山 浩	委員
19	14527	稲葉 昌弘	委員
20	14529	麦倉 常治	委員
21	14536	後藤 尚	委員
22	14626	内間 茂	
23	14656	石井 シモ子	
24	14667	増渕 仁一	委員
25	14679	仲畠 正子	委員
26	15212	深谷 篤志	委員
27	15382	深谷 優子	
28	15384	君島 敏明	
29	15456	青山 孝雄	
30	15625	村田 美代	
31	16048	坂口 直孝	
32	16405	荒井 理	委員
33	16434	鬼頭 秀夫	
34	16459	大島 健一	委員
35	9168	浅川 とみ子	
36	16532	吉澤 順一	
37	16671	山口 剛	
38	16705	水野 雅章	
39	16822	林 祐寿	委員
40	17083	早川 誠次	

【2025(令和7)年4月17日現在】

支部報事務局より

○支部報第 18 号編集にあたりまして、多くの方のご協力によりなんとか発行にこぎつけました。感謝申し上げます。

○ついてはいつものお願いです。登山や事業が終了しましたら報告書を作成されることかと存じますが、報告書と写真等を必ずメールにて送信いただきますようお願いいたします。写真はコピーできるように、JPEG でご送付ください。

○報告書をワードでご送付くださり、同時に写真を JPEG で添付していただくと、報告書の編集が手際よく進むのはもとより、写真もスキャナーで読み込んで取り入れるよりも鮮明に印刷することができます。

○ご送付いただいた写真は、原稿の配置等を勘案して取捨選択して掲載しております。残った写真もカット等で使わせていただく場合もありますので、何枚かご送付いただくと有難いです。

○当方のメルアドです。

kami-jin@sepia.plala.or.jp



原稿と写真を
どうぞご送付
くださいね！